灯

教育ハイ、ニコッ、ポン ～景原風

草野　義輔

残暑厳しい日曜日の朝、玄関のチャイムが鳴った。家族は前日から出かけていて私一人であったので仕方なく応対に出た。

中年の女性が一人立っている。聞けば大阪から四十年ぶりに故郷日田に帰ってきたという。わが校の卒業生で恩師である私の母の消息を尋ねてきてくれたとのことであった。母は長く英語の教師をしていたが、米寿も過ぎ、あいにくとその日は不在であった。

「四十年たった今でもお母さんに教えてもらった事を覚えています。それは『はい、にこっ、ポン』というのです。先生から指名されたらまず『はい』と大きな声で返事をして『にこっ』とほほえんで『ポン』と立ちましょう、と教えられました。ほかにも大切な事を教えてもらっていますが、特にこの言葉はおそらく死ぬまで忘れないでしょう」と言われる。教師と生徒のほほえましい様子が浮かぶ話だ。

そんな話を聞いているうちに似たような事を思い出した。それは数年前同窓会役員の方々が母のお見舞いに来られた際、玄関に入るなり「カムカム　エブリバディ」と歌い出したのである。

全員が異口同音に授業の始めにはいつもこういって歌を歌っていた。五十年たった今でも忘れない、ということであった。

四十年、五十年という長い年月を過ぎた今でも教え子たちが授業の事を覚えているということは教師冥利に尽きるのではないかと思う。

三十人学級だの複数教員による授業など学校現場への要求や要望はあまたあるが、それよりもどのくらい印象に、記憶に残る授業ができているか、足元を見直さなければと思う。

（日田市昭和学園高校理事長）